
赤い帽子の駅長さん（メルヘン列車）

whitecat

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い帽子の駅長さん（メルヘン列車）

【Nコード】

N2987H

【作者名】

whitecat

【あらすじ】

突然の事故でお母さんを亡くしてしまった、ごんたくんが夢の中で母親と一緒に旅をします。銀河鉄道の夜をモチーフにした、福知山線脱線事故へのレクイエムです。

(前書き)

福知山線脱線事故で亡くなられた107名のご冥福をお祈りいたします。

このお話は、今から4年前の福知山線脱線事故の事を忘れないために書いたものです。

人の命は、本当に重いものであることを感じていただければと思います。

こんたくんは、小学2年生の男の子、とても明るくて元気な子だったのですが、最近ちよつと寂しそうです。それは、こんたくんのお母さんが電車の事故で亡くなってしまったからです。

「お母さんに、会いたいよ。」

こんたくんは、夜になると何時もお父さんにそういつて困らせていました、お母さんが亡くなったということが今も信じられないのです。

あれほど元気だったおかあさん、今日はバーゲンがあるから・・・それがあんなことになるなんて。

今日もこんたくんは、布団の中で泣いていました。

実は、今日学校では母の日のお話をしていたからです、そしたら余計にお母さんのことを思い出してしまつて。

こんたくんは、やがて泣きつかれたのかそのまま眠ってしまいました。

お父さんは、そつとこんたくんを布団に運んであげました。

その日、こんたくんは不思議な夢を見たのです。

こんたくんは、見たこともない立派な駅の前に立っていました、しばらくするとそこに昔走っていたと言われる蒸気機関車が引張る列車がやって来ました。

列車は、こんたくんの前に止まりました、こんたくんはスーッと誘われるように斜内に吸い込まれていきました。

車内は、薄暗くてすぐにはわかりませんでした、多くの人が乗っていました。

薄汚いぼろをまとった男の人や、派手な化粧の女の人、こんたくんは少し恐ろしくなって次の車両に走っていきました。

ボタン。ドアを開けるとそこは誰もいません、そして真中付近まで歩いてきた時そこにはお母さんが乗っていました。

こんたくんは思わず叫んでしまいました、「おかあさん」

おかあさんは、少しびっくりしたような顔をしてそしてしばらくするとにっこり微笑んでくれました。

「あら、どうしたの学校は行ったの？」

優しいお母さんの声でした、こんたくんは思わずお母さんに抱きついていました。

「おかあさん、やっと会えたね、僕と一緒に次にこの汽車が止まったところで降りて反対の列車で帰ろう。」

こんたくんは、話しました。でも、お母さんは少し寂しそうな目をして言いました。

「こんた、それは出来ないのよ。この汽車は真の幸いを探すための汽車なの。」

こんたくんは、何を言ってるのか判りません、

「それなら、僕お母さんとどこまでも一緒に・・・」

そんな時、ドアが開き車掌がやって来ました、何時の間に現れたのか一つ先の座席に座る私たちのような顔をしたおじさんがあたふたとしています。そういえばこんたくんは、この汽車に乗るときに切符を買わなかったことに気が付きました。

「どうしよう、切符買っていないし、車掌さん怖そうだし・・・」
おかあさんは、車掌に切符を見せました、車掌は切符に印を入れて丁寧に戻しました。

「次、あなたも」

車掌はこんたくんに切符を出すように言いました、でも買った記憶がないのですからどうしようありません。仕方なく胸ポケットに手を入れてみると、紙切れが出てきました。そんなもの胸ポケットに入れたはずは有りません、どこから出てきたのでしょうか。

単なる紙きれではありません、何かの切符のようです。こんたくんは恐る恐る車掌に見せました。

その紙片を見た車掌は、いきなりきちんと背筋を伸ばしその紙切れに食い入るように見つめていました。

「おお、これは・・・」

車掌は、急に丁寧な言葉で「ご乗車まことにありがとうございます。正12時にはあなた様をお送りできることでしょう。」

意味不明な言葉を残し車掌は消えていきました、そう消えると言う表現がぴったりでした。

しばらくすると、お母さんが言いました。

「こんた、お母さんはこの次の駅で降りなくてはならないのです。お別れの時が来ました。」

こんたくんは、お母さんとせつかく会えたのにと泣いて降りないでと頼みました。

柔らかな音楽が流れる中列車は駅に到着、多くの人が降りていきました。

既にこんたくんのおかあさんはホームを歩いています。幸いを見つけるためでした。

こんたくんは、自分もお母さんと一緒にと思い駆け寄ろうとしましたが、車掌がどこから現れてこんたくんを再び車内に押し戻してしまいました。

おかあさんはもう見えなくなっていました。

こんたくんは、また独りぼっちになってしまいました。

リリリリリン、列車の発車を告げる音が聞こえてきました。

そこで、急に目が覚めました。目覚ましが朝を告げたのです。

目を覚ましてみれば、やほりそこには、お父さんとこんたくんの二人だけでした

ああ夢だったのか、でもこんたくんの胸ポケットに残った紙切れはありました。

でも、それは大変小さな文字でかつ漢字が沢山あったので、こんたくんには読めませんでした。

それから、数年。

こんたくんは、小学6年生になりました、お父さんは再婚し新しいお母さんがこんたくんの面倒を見てくれます。

本当のお母さんと変わらない愛情でこんたくんを愛してくれました。

そして、もう一つ嬉しいことがありました、それはこんたくんに妹が出来るのです。

その妹って誰だかわかりますか？

実は、こんたくんの本当のお母さんが生まれ変わって、こんたくんの妹になるんです。

こんたくんが夢の中で車掌に見せた紙切れは、実は天上の神様がおかあさんを帰してあげる、でもそれまではいい子でいなくてはいけないよとかかれたメモ書きだったのです。

車掌は銀河鉄道の車掌ですから、この内容が読めたのです。だからとても改まって丁寧な態度でこんたくんに接してくれたんです。

空想第四次の銀河鉄道は今回の事故で犠牲になった多くの人を乗せて、本当の幸いを捜しに出かけて行ってるかも知れませんよ。

ほら空を見上げたら見えてきませんか、遠くにかすかに光赤いランプ、そして物悲しくも懐かしい汽笛の音が・・・聞こえてきませんか？

f
i
n.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2987h/>

赤い帽子の駅長さん（メルヘン列車）

2010年10月17日02時46分発行